



雞  
口  
集



5  
2199  
1



門利5  
2199

醉古堂樵風著

藤年 津

雜口集 乾坤

起風輯校

于田燠



雜口集序



凡技至其極謂之聖可也揚氏聖於射造  
父聖於御包丁聖於解牛伯樂聖於相馬  
史遷之於文少陵之於詩詩文之聖也以  
我邦言之則道風聖於書雪舟聖於畫  
利休聖於點茶道策聖於圍碁貫之  
之於歌芭蕉之於俳俳歌之聖也余嘗

觀芭蕉文集恬澹優游不競不爭不以滑稽損誠不以諧謔傷氣風流溫藉自然可慕非唯無一點塵想蓋人品高矣如其發句亦是化工所致極精極妙有勸有懲有諷有規洪纖巨細淺深厚薄從制從變唯其意所命故天地所覆載鬼神所秘惜鈎而出之揭而露之靡非

弗寫之景情聖於俳者非邪嗟拘拘儒者斷斷文人抗顏豎立類苟以鈎名競利為心者其如何哉江濯纓信奉芭蕉鑄黃金事之者三十年如一日朝吟暮詠惟日不足受其衣鉢紹其正脉是願蓋其所長在滑稽文縱橫錯落馳驟怪駭獨自擅其場雖與恬澹

優游不競不爭者有間其炫爛之極必  
至平淡之境我刮目而待之世皴生小豎  
吻黃而乳臭者動輒譏之以假字文彈  
之以俳諧文寧為雞口勿為牛後與摹  
史遷少陵而不成不如學子假字滑稽極  
其精妙之為勝也蓋自芭蕉氏出  
其道大闡以滑稽鳴世者以十數而得

其正脉者鮮矣支考輩傑驕自喜以凌  
轍先輩主張門戶與蕉公背馳也甚  
矣安在存其風流其所著文藻文監亦  
是狡獪伎倆何足以為範而世之無識  
徒尊之準如來奉之擬菩薩稱之為  
美濃派者百有餘年于茲濯纓其有  
慨于斯歟單騎一呼直突其營壘拔

之幟奉之旗左攻右擊不遺餘力至  
令其身無完膚不亦快乎余儒生也  
資稟庸劣亡論不能增光孔氏其  
於詩筆亦不能窺漢唐作者之域究  
遷甫精妙之境無益儒門無裨藝  
苑春蠶然書中一毫蝨魚得不為牛後乎  
嗟經學自標文章自唱者率是僻

見拘說建新角奇綺語娼言欺世虫豔  
俗沾沾自喜不自知其醉生夢死于  
大霧中而我輩莫能之矯得不愧  
濯纓女乎濯纓女播之名族家富千財而  
以賑恤為心蕉翁所謂其人雖富其  
品格不鄙者歟

天保庚子仲春吉備仁科幹題

北越 樸齋書



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '樸齋' and '北越'.



雞口集卷之上

播磨 楚風著

養年陳氏遺愛之記

醉古堂自序

有馬紀行

悟蒼地辭

文雅園時雨舍序

蘼流行辨並辭

句帖自序

天橋立眺望記

題五芳三日月辨

墨巢亭記

培燕明癖

良叔行

庚辰秋吟行

亭已待良叔辨

瞻望樓記

癸未秋吟行

金昆羅系詩記

桃五句集序

醉古堂自序

有花此人成醉一むるも均一か花さる時成  
 或るは涙成はくく先杜れぬかか  
 あらけは花の西上人は情何れ終や  
 著く花人のさるる鳥草地も夕息は翁媽も  
 きぬるの乙女子等中傳おののさるる  
 室子規より下戸あま上戸あねさ終や  
 醉さるるなりを醉よ也又均一からる  
 上醉多始皇は夢の  
 醉よとてはハ星のさるる





大己安命此臣等もや電城山事を代受領せしむ  
少くも世々も世々も世々も世々も世々も世々も  
上座の御座りては御座りては御座りては御座りては  
中座の御座りては御座りては御座りては御座りては  
戸田の御座りては御座りては御座りては御座りては  
の御座りては御座りては御座りては御座りては  
時々の御座りては御座りては御座りては御座りては  
御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
あつては御座りては御座りては御座りては御座りては  
奪つては御座りては御座りては御座りては御座りては

の御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
王子の御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
の御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
最後の御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
るも今も御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
かゝる御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
此の御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
くも今も御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
此の御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては  
御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては御座りては

あはれなる世に甲子年五月十日を以て支上り御家  
に召し入りしに御家より一箇人の御家より一  
ハ九世を以てしに御家より一箇人の御家より一  
と云ふ御家より一箇人の御家より一箇人の御家より  
依家ありしに御家より一箇人の御家より一箇人の  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇

昔後小倉の仕、朱鬼後鬼より一箇人の御家より一箇  
今も子孫を以てしに御家より一箇人の御家より一箇  
の御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇  
御家より一箇人の御家より一箇人の御家より一箇

御之めく應つて製す坤之華を尊にほろひて神の  
社を境にして修す御事ありて地獄也地獄ありて  
りしあつちて定れ社の西を南より西に轉り流るるは  
流るるは東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
流るるは東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
流るるは東に流るるは流るるは東に流るるは東に

あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に

あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に  
あつては東に流るるは流るるは東に流るるは東に

かきつらむるはなはたしとて

城をさしふる唐丁家、物好くすはば後く羅漢の  
〜〜海にもあはれ候もあまき好むるは昔の節  
〜〜中らむるからむ魚の節は、瞬しくとらむ  
〜〜とせむる節は

はなはたしとて

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて  
豊大園も今も唐丁家、あきらむるは海はたしとて、  
中〜〜あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて  
はなはたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

はなはたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、

あきらむるは海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、海はたしとて、



身元曰伊丹  
 上なき元より  
 此の世に  
 心から興  
 の世に  
 元より  
 元より  
 元より

くも田庄へ伝ひ玉社より此は神傳事神傳事此  
 神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此

書中此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此

傳事神傳

此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此  
 此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此神傳事此

如月の如くお  
 のう名をあの  
 としははれ  
 柘子座のくむ  
 考う

ありく月研席のつらきつらき路のれ果てた名を  
 村杖の折採れを法結をんやま経の故れ果のま  
 く年をさるるか利備のふ法利を宗證の園をれ  
 何れもむたうはつたつたの樹をま経のま  
 忘ふともな熱を海をふうむひ経をさるか  
 故れれま備中のたつたをさるかむひ経をさるか  
 忘はるたの園のたつたをさるかむひ経をさるか  
 大をさるかむひ経をさるかむひ経をさるか  
 あつたむひ経をさるかむひ経をさるか  
 さるかむひ経をさるかむひ経をさるか

もちまの魚肉れまむの魚肉れまむの魚肉れまむ  
 むまのむまのむまのむまのむまのむまのむまの  
 けまのむまのむまのむまのむまのむまのむまの  
 中へくまのむまのむまのむまのむまのむまの  
 夢のむまのむまのむまのむまのむまのむまの  
 砂を踏むむまのむまのむまのむまのむまの  
 砂を踏むむまのむまのむまのむまのむまの  
 砂を踏むむまのむまのむまのむまのむまの  
 砂を踏むむまのむまのむまのむまのむまの

又種園時雨會序

ねれあつたのさつたむまのむまのむまのむまの





新く不れあり終るるを重れしは

向帖自序

むしき一書に依りて其の書に  
作るるに文字の可きこと  
氏うるや和代乃佳作の  
三五十六の文字に其の  
破りて其の字を其の  
字に其の四の字に其の  
あつて其の字を其の  
字に其の字を其の

夕暮るる身は之世に暮候  
山に暮るる身は之世に暮  
八幡の山に暮るる身は之  
九折も子規の啼きに其の  
あつて其の字を其の  
あつて其の字を其の  
あつて其の字を其の  
あつて其の字を其の  
あつて其の字を其の  
あつて其の字を其の



此後、  
情、  
十、  
の、  
至、  
余、  
形、  
此、  
あ、  
以、

う、  
と、  
今、  
と、  
七、  
た、  
み、  
此、  
や、

詠竹花枝うきと絶すやしくは奈親まきふ降  
きふらうくさうふとゆ大伽藍ハ伊勢大和は宮伝と  
しむねま越れら御のちとらふしにひひあふんや  
里れあふむさひぬらむに歌を甲里まにうあふ山は  
持さくふるまふ嶽もさうを續くさやあふんら絶  
きふと里村ふしふさく魚ちり後し洞く雲久  
かふま太ふと海あけ船中あけいさうと絶あうらあ  
式歌のおもひはは誘うやうを傳くし保昌のけあれ  
任ふらひちあふんあは海あけのまを造化自れれと  
奈親まきふ下ふふあふんあはれとあふんらと

斜日あふと定成ふあふん一まをれ鐘伝をきう  
くすゆ鳥きとと成争むや老くきふんあふん  
飲酒ふちあふんらあふん絶くまふ月折らうと大いし  
歌あふんらむなからけさふあふんあふんやとあは浦  
のそり成あふんは言はれ市とあふんあふん

歌五芳先三日月

奈むうのけあふれ成さうとあふんあふん  
文を甘く成あけけく舞はけさまけけ一あふん  
のそりあふんあふんあふんあふんあふん  
はたさけとあふんあふんあふんあふん

あゝ、近かり、鏡ち照る、身成又さるゝも、さるゝも、  
ハ一草花きつゝ、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
の、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
（廣く、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
浅く、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
糸、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
浅き、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
昔、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
一、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、

いゝ、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
枝、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
よ、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
け、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、

三葉集の記

玉の、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
皆、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
あ、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
さ、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、  
さ、さるゝも、さるゝも、さるゝも、さるゝも、

茂子成殿の目よかあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
皆之釋れぬ一やと一悔悔の一痛さるるに  
是あふぬさるるに彼さるるにむか  
しるるにあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ

素大清代筆 培慈 棘 龍 龜 辭  
至恩に信ずるにまゝにさるるにやあらうなる人よ

まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ  
まゝにさるるにやあらうなる人よ







今と申す村を御とて申す一節に御記し候  
に御と申す御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候

庚辰秋吟稿

貞敷政要とていふに御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候  
に御記し候に御記し候に御記し候に御記し候

むかしあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
けをささしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
けをささしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
けをささしつねなるけあをささしつねを困らしむ

子傳あしつねなるけあをささしつねを困らしむ

辛酉秋行良お輝

を月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ

を月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ  
月けあさしつねなるけあをささしつねを困らしむ

子傳あしつねなるけあをささしつねを困らしむ

晴皇樓記

撰ハ大坂戎略ノ事アリテ其ノ由縁ヲ述  
本傳ハ其ノ事ヲ述ルルニ由リテ撰スル

上

橋を渡りて早う歸りて中へ入付ければまゝかゝるは  
 以半の膝巾の裏腹にまゝに一筆の腰巻にへてから  
 をとらぬたゞに歸りて私に歸りてなをへてあゝい  
 梅屋の櫓を叩く事なるもさうあつたけさへしては  
 そゝゝゝゝゝゝゝを叩く所を聞いてはなりのて干渉  
 とおはさへかゝるゝあゝゝゝゝあゝあゝあゝあゝ  
 かの志気なけりて子規のさうらをさきあゝの  
 へたあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 一時に早うあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

せよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
 さけのやいばりやいばりやいばりやいばりやいばり  
 後うとむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 へ歸りてあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 なるのなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 へるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 人ぬあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 忠信うゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 系杜撰うゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 のあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

必し白墨  
 杜撰  
 存  
 存

癸未秋序

七月廿月ハ梅う結くさきれふり結めりふ付ありく  
 わざい結を止のひさる月ハ整いんと人をと候を  
 あむ結体くさむうさく無れたきことなれあ  
 あむいさほく結をさるなすうさくさくさくさく  
 けさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 かなんさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 しさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 村やさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

陽う夕さくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく



花よりさくらを誇る人こそはるばるさくらを  
斜方より花を賞れ誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを

作者曰はく  
宮内卿の  
の御をたの  
ゆゑにさくら  
をあれはか  
の御を元三  
此下向せし  
を土人あを  
勅使下向し  
あはれは土  
のついでに  
さくらを

宝の御神々々を誇る人こそはるばるさくらを  
神にかたむけ神を賞れ誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを  
さくらを誇る人こそはるばるさくらを

花よりさくら

七

衿もくすねりててしむり時のまをを眺く  
さ仁の糸波うきしきりててち月ハ信宛のお  
のまぬまのの海あまのまねたまをわさ  
姑獲城のこまゆりあまのまねたまをわさ  
するおのまぬまのの海あまのまねたまをわさ  
まねたまをわさ  
飯けしゝたううり種のおしゝ後子うりてう  
きまなうりてうりてうりてうりてうりてうり  
り種のおしゝたううり種のおしゝたううり  
まねたまをわさ

上候とるうりてうりてうりてうりてうりて  
りてうりてうりてうりてうりてうりて  
るをわさるるまをわさるるまをわさるる  
りてうりてうりてうりてうりてうりて

まねたまをわさるるまをわさるるまをわさるる  
りてうりてうりてうりてうりてうりて  
まねたまをわさるるまをわさるるまをわさるる  
りてうりてうりてうりてうりてうりて

家ありの多き田舎は作ふと入つては家集れりとの  
説くはたれ多の事をも疎まれの説かすは説

白くありて入つては家集れりとの説

ナラる備中志備は字々傳傳ありて代れせりとの説  
代の神傳と見えくさるる見えたりと田舎をさるる  
ありて家集れりとの説は太社

本家とさるる家集れりとの説

此の神上は神事をもさるる家集れりとの説あり  
ありてさるる家集れりとの説を説くもの供傳は  
は家集れりとの説ありてさるる家集れりとの説

成奏しき一物の筆子を集るる大巻くたつては子集  
を以て成奏しき一物の人集れりとの説ありてさるる大  
小ありてさるる一社の社集れりとの説ありてさるる  
位公富士の社に社集れりとの説ありてさるる大巻内り  
集れりとの説ありてさるる五七の社集れりとの説あり  
一の字ありてさるる家集れりとの説ありてさるる一  
今れと備中一物集れりとの説ありてさるる一物の言  
備中志備は字々傳傳ありて代れせりとの説ありて初  
法也と見えくさるる家集れりとの説ありてさるる二里  
井の言ありてさるる十四の社集れりとの説ありてさるる



さつゝ新筆を何某とくは必此産物端を  
 あきたよも後ちのきく物とよふありさう  
 けちとく土地海中、羊蹄とくく、崎くかきさ  
 さうく、海やうくかきさ、海とくあまか  
 こくくのつひ、と甲此海口はあ、つむ、海、一瞬  
 け、さ、た、わ、も、赤、松、の、ま、た、ま、を、海、の、  
 美、土、此、ま、さ、つ、も、向、ま、ち、け、り、い、ち、海、の、氏、  
 思、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 け、新、あ、ま、い、士、成、行、さ、う、く、あ、久、民、の、花、の、意、  
 き、く、之、海、此、出、く、あ、く、あ、院、め、ま、い、く、た、け、さ、く、も

五五

け、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 く、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 又、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 か、く、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 く、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 く、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

枕五句集序

此、越、の、枕、五、句、集、を、編、む、に、富、樫、の、情、を、  
 慶、り、を、の、り、し、一、度、山、伏、の、あ、も、あ、く、く、  
 か、つ、ら、き、也、樹、の、さ、さ、さ、く、あ、い、の、浦、を、山、伏、の、く、火、  
 か、く、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 枕、此

于田輝

管あわと年う後日ち海書あつたしと紙魚  
の位あつたし果さんも本定あつたしかくハ僅  
りされと後今の管もまをあつたしまのさつた  
とあらんうされもあつたし今あつたしむの  
管さつたしむのさ可あつたし

鶏口集卷之上終

